

保護者との連携を考慮した学級指導

山本行雄*

Classroom Teaching with Teamwork of Students Curators and Teacher.

YAMAMOTO Yukio

キーワード：学級指導，学級担任，保護者，学級通信

1. ま え が き

高専3年生の中だるみは、これまでも指摘されてきたが、学習に対する意欲，生活習慣のあり方，心身の健康，自分の将来への考え方等について，単なる中だるみだけで済まないものが感じられる。

筆者にとって，平成14年度の電子情報工学科3学年の学級担任は平成8年度以来の経験であった。通常の授業とは全く違った問題を抱えている学生が多いことを実感し，また，数年前の学級担任の経験がほとんど役に立たないほど，変わってきているようにも見えた。

年度初めに何人かの保護者と連絡を取った際，進級や出欠席の状態，クラスの運営等についてほとんど理解されておらず，保護者との連携の必要性を強く感じた。学生の出身地が広範に分布しているため，学級担任と保護者が直接連絡をとりあう機会が少なく，また，学生数48名の学級では，通常の指導では学級担任の力が及ばない可能性も考えられた。このようなことから，学級通信を発行し，学級担任と保護者との連携を図るための一助とした。学級通信を利用した指導は本校では1件報告がある¹⁾が，筆者にとっては初めての経験であった。他に，保護者向けのホームページ²⁾を開設した。

3学年の学級運営上の幾つかの問題を含めて，学級通信発行による保護者との連例の状況について報告する。

2. 学生の状況

年度初めにおいては，新たに増加した専門科目の

* 電子情報工学科教授

原稿受付 2003年5月20日

授業に集中できない学生が目立った。このため学級指導は出欠席に関する指導と個人面談を中心に行った。この期間の落ち着いたのなさは学習時間の少なさにも現れている。表1は新学期から中間試験までの自宅学習時間を調査した結果である。

学習に関しては，当然のことながら既に保護者の力の及ぶレベルではなくなっており，一方，学生の家庭学習時間は短く，学習を指導する教官だけでなく保護者にとっても頭の痛い問題である。試験直前まで学習時間のほとんどは実験レポートの作成と宿題のみであり，常時予習，復習を行っている者は5名前後であった。また，試験直前の1週間もあまり学習時間は増えておらず，試験期間中のみ試験勉強をしているのが見てとれる。また，試験期間中の学習時間が平均4.5時間も十分な時間と思われない。なお，同様な調査を学年末に行ったところ，学習時間は日常において約30分，試験期間中は約1時間

表1 前期中間試験までの自宅学習時間調査結果

期 間	1日平均学習時間
4月8日～30日	1.1時間
5月1日～31日	1.4
前期中間試験前1週間	1.7
前期中間試験期間	4.5

備考) 自宅学習時間には，自主学習の他に，宿題，実験レポート作成の時間を含めている。

表2 冬休み中の読書

読書状況	人 数
・1冊も読まなかった	44名
・1冊以上読んだ	42

表3 国際比較に使用された科学的基礎知識に関する正答率

調査対象	正答率	備考
・デンマーク（成人）	64[%]	世界順位1位
・日本（成人）	51	＃ 12位
・電子情報工学科3年生	78	同学科5年生の正答率は83%であった

増加しており、改善が見られた。

基本的な学力と並んで学生時代の読書の重要性があげられるが、年末年始休み期間中の読書状態は表2であった。休み期間の大部分を読書に充てた学生も2人いたが、本学級の学生の過半数は読書をしていない。時間の制約もあり読書指導はしなかった。

これでは、一般的な教養について心配が生じるが、現状ではこれを調査する方法がない。便法として、科学的知識に関する調査をおこなった。調査は、アメリカの国立科学財団（NSF）が成人を対象に調査したものをそのまま使用した³⁾。結果は、各国の成人の科学知識を大幅に上回る好成績であった。技術に関する先端的な教育を受けている本校学生がこの程度の科学的知識に対して好成績を得るのは当然であろうが、教育の効果が見えていることは確かであり、日常の授業、ホームルームでの指導等の重要性が伺える。

3. 学校と保護者との連絡、連携

本校において、学校と保護者とは表4のように幾つかの方法で連携を図っている。特に工嶺祭と並行して実施される保護者面談は保護者の関心が高く、本年度は電子情報工学科3年の保護者の出席率は100%であった。保護者と学級担任が直接会って話す機会は保護者面談に限られていると言って良く、個々の学生についての状況や、学級の状況は十分に伝えきれていないのが現状である。通常の状態ではそれほど問題はないが、生活指導、学習指導など、特別な指導が必要になったときに連携の少なさを実感する。

学級担任の方針を伝えたり、保護者から気軽に学級担任に問い合わせができたならば、年度末になっ

表4 学校と保護者の連絡・連携の例

学校と保護者との連携	概要
・成績表の送付 ・保護者面談 ・地区後援会	前期末と学年末の年2回 工嶺祭期間中に実施 地区毎に年1～2回学校からの情報提供と面談
・学園だより送付	年4回保護者へ

表5 学級通信の主な内容

号数	発送日	主な内容
1	5月28日	・3学年概要、成績と出席
2	7月3日	・中間試験結果
3	7月24日	・夏休み注意事項
4	10月27日	・前期成績、進路、専攻科
5	11月6日	・保護者面談
6	12月20日	・後期中間試験成績
7	3月5日	・年度末の状況

て進級等で大きな問題が発生するのを最小限にすることができるのではないかと、また、進路変更等も意欲を持って自分のすすみたい道を選択できるのではないかと考えられる。

学級通信の配布の方法は次のようにした。特活の時間に学生に配布して読み、幾つかの説明を加えた。これは、学生に学級通信に関心を持たせること、保護者から聞かれた場合に、状況を説明して親子の対話を促進したいためであった。その後、学生各自が自分の保護者宛の住所を封筒に記入して学級通信を封入して、学級担任が発送した。

学級通信は7回発行した。その主な内容は表5である。内容はホームページでも読めるようにし²⁾、その旨保護者へも伝えた。ホームページの利用は保護者の他に、学生の親戚、他高専の保護者にも広がったようであり、その旨のメールを何通か受け取った。

保護者との連絡（主に電話）の主な内容は、欠席に関すること、健康に関すること、家庭内の問題に関すること、および、学習に関することであった。このような事情を反映してか、保護者向け学級通信の内容も成績と出席に関するものが多くなった。進級条件については、ほとんどの保護者は承知していたが、概して、問題のある学生のほうが、保護者に進級基準等を話しておらず、また、保護者にしてみると地区後援会等ではこういう内容については質問しづらいという事情もあって、困っているようであった。そこで、表6のような内容を学級通信に記載した。これとは別に、12月発行の第6号において改めて進級条件を掲載した。これについては、学生は十分承知しているはずであるが、何人かの保護者から問い合わせがあった。特に、精神的な問題で、通院、欠席している学生が4名おり、成績以前に出席時間が足りない問題が深刻であった。毎日登校しているが授業に出られず保健室にいる者、保健室へ行くこともできない者等の問題もあり、学級通信を契機として頻繁に保護者と連絡を取った。

表6 学級通信に記載した進級等の記事例

学級通信第1号(5月28日)から

- ◇すでに、ご存じとは思いますが、長野高専では、授業・行事への出席を重視しています。それに応じて、毎年沢山の学生が皆勤表彰を受けています。
- ◇出席時間が不足すると、学年の修了ができません。かなりの努力を必要とします
- ◇学年を修了するには、欠課の時間数が、科目毎に、授業時間数の1/3以内であること、また、全授業時間数の1/5以内の欠課時数であること、が必要です。実技科目は1/10以上休むと成績は「不可」です。
- ◇その上、50点以上の成績をとらなくてはなりません。
- ◇なお、本校では、登校して保健室にいた、という状態は欠席の扱いをしています。

4. 学級通信に対する保護者の感想と学生にとっての3学年

4-1 保護者の感想 最終の学級通信(第7号)の送付と同時にハガキによるアンケートを実施した。アンケート対象は保護者47名、回収率は70%(33名)であった。

また、学生に対しては、年度末の特活時間に3学年に関するアンケートを行った。回答率91%(43名)であった。回答はすべて5段階とした。

学生が保護者に学校での出来事を話しているかについて学生対象に調査した結果を図1に示す。学生は、比較的良好に話していると感じているようである。平均は3.4である。全く話さない学生からよく話す学生まで広く分布しているが、1(全く話さない)と答えた学生4名のうち2名は学校生活でも問題があり、多くの指導を要した。当該学生の保護者とは学級通信が契機で頻りに連絡がとれるようになり、幾つかの問題を解決できた。

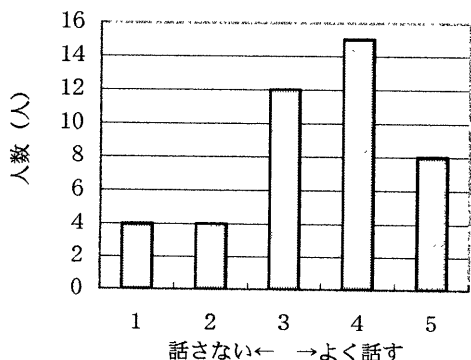


図1 学校での出来事を家で話すか(学生)

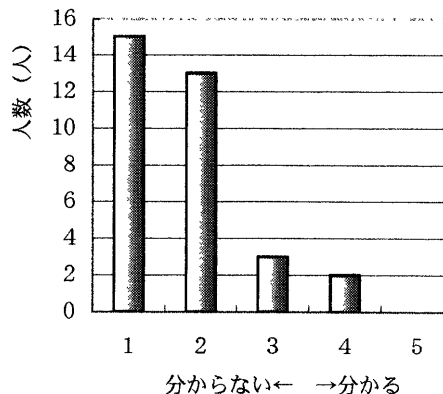


図2 学級通信がなくとも学校のことが分かるか(保護者)

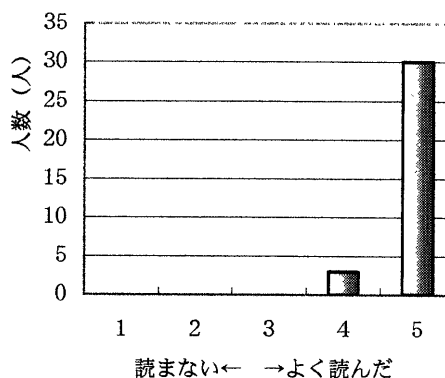


図3 学級通信の読まれ方(保護者)

一方、保護者の立場からすると、図2のように、学校の様子ほとんど分からないと感じている者が多く、学校の情報の理解程度は平均1.8であり、保護者の知りたい情報を学生が家庭で話しているかどうか、また、話していると感じている学生と保護者との実感とはかけ離れている可能性がある。進路、健康等で学生本人が保護者と相談してきたと報告してきたことについて、担任から保護者に確認をとったところ、大事な事項はほとんど伝わっていないことがあった。

学級通信は図3に示すように、良く読まれているようである。平均4.9であった。学校から送られる「学園だより」と合わせると学校の事情が良く分かる、と伝えてきた保護者もあった。図4からは多くの保護者が学級通信は役立ったと感じている事が分かる。平均4.8である。質問項目とは別に、感想と学校への希望等を自由に書いていただいたところ表7のような意見が寄せられた。

4-2 学生にとっての3学年 学生にとつ

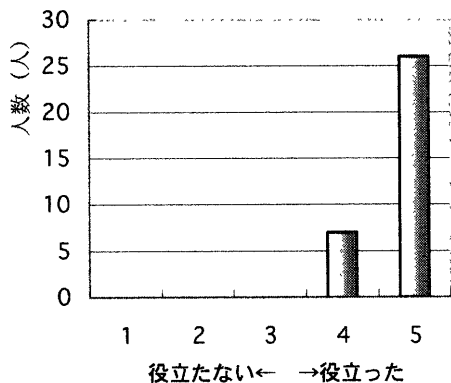


図4 学級通信は役立ったか (保護者)

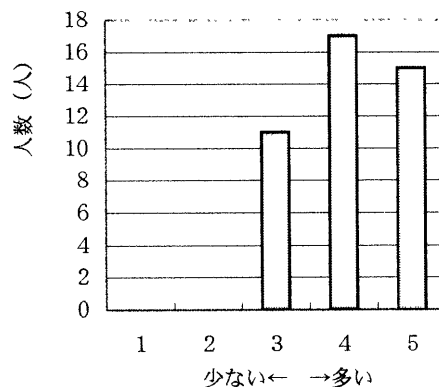


図6 これまでに比べて得たもの (学生)

表7 保護者からの意見

- ◇校内の情報は子供を通して以外ほとんど入ってこない
ので学級通信のお陰で不安がなくなりました。子供
との会話も増えました。
- ◇子供からの話だけでは良く理解できないことがあり、
役に立ちました。
- ◇これからも学級通信を続けていただきたい。(9名)
- ◇成績以外は学校でどう過ごしているのかわかりませ
んので役に立ちました。
- ◇寮に入っているため話す機会が少ないのですが、学校
の様子を知らせていただき息子との会話が増えた。
- ◇学園だよりも良く読みますが、学級通信でクラスのこと、
勉強のことがよく分かりました。
- ◇学校の様子などを質問攻めにしても返ってくる答えは
僅かです。学級通信は学校全体のことや他の学生さん
のことが分かって助かりました。

て、3学年は図5に示すように、これまでの学年よりずっと大変であったと感じ、その平均は4.5である。また、この学年で得たものがあつたかどうかについては、図6のように多くのものを得たと感じており、平均4.2である。学生にとっては大変ではあるが、得るものが多い貴重な学年であったと自覚していることが伺える。この貴重な1年間をやり豊かな学年にすることが極めて大切であり、学級指導もそれに見合ったものが必要であろう。

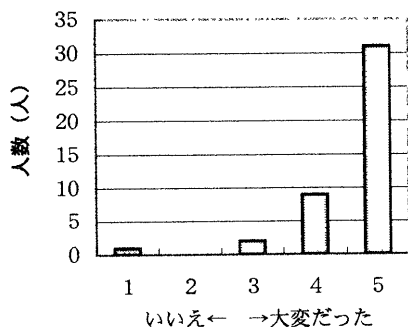


図5 3学年は大変であったか (学生)

5. あとがき

1年間の学級担任を終え、数値だけで見ると学生数48名の内、年度途中転学1名、年度末進路変更4名、留年4名、休学(復学)1名という、不本意ともいえる結果であった。しかし、転学と進路変更をした5名については、新たな道を見つけ、意欲的に次のステップを踏み出したことに評価をしたい。留年した4名についてはいずれも新しい年度を精一杯努力したい決意を自ら語っており、これからの努力に期待している。

この1年間の学級指導は不十分ながらも保護者の理解によって乗り切ることができたと考えている。学級通信の記事が契機となつての問い合わせや打ち合わせが多く、また、それによって幾つかの問題の解決や理解を得ることができた。学級担任と保護者との連携は重要であり、学級通信は簡単な方法でありながら、かなり成果が期待できる方法であったと考えている。

なお、筆者の私的な事情から、企業見学、保護者面談および校務を他の教官に代わっていただいた期間があつた。また、多くの保護者から激励等のメールや電話をいただいた。多数の教官、保護者からの援助によって学級指導ができたことを記し深く感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 児玉英樹：高専における学級運営に関する一考察
—学級通信による保護者との連携の試み—論文集
「高専教育」第26号, pp.549-554 (2003.3)
- 2) <http://www.ei.nagano-nct.ac.jp/Teachers/yamamoto/jhogosya/hogosya.html>.
- 3) <http://www.ei.nagano-nct.ac.jp/Teachers/yamamoto/student/3Jkagaku.html>.